

歴史探訪

クラブ

History Inquiry Club



文化財課 ☎22-1720
(博物館) FAX 22-2028

明治の博覧会と田原

明治時代は、日本が近代国家へと変わるためにさまざまな取り組みが行われました。殖産興業もその近代化への大きな政策の一つでした。そして、その政策を達成するため、国内の産業の競争・発展を企図する事業として内国勸業博覧会が開催されました。

この博覧会は計5回行われ、明治10年に東京で開催された第1回では、出品数1万6147点、入場者

数45万4168人、会場を大阪に移し、明治36年に行われた第5回では、出品数が27万6719点と第1回の20倍となり、入場者数も435万人を超えるほどの大盛況となりました。

昨年、この博覧会に関する資料を寄贈いただきました。明治36年の第5回の博覧会の賞牌（メダル）と賞状です。受賞者は赤羽根の鈴木治左衛門で、品名は「煮乾鱈」（イワシの煮干し）でした。赤羽根は江戸

時代から地引網によるイワシ漁が盛んでした。明治31〜32年は特に大漁で、たくさんさんの収入を得た村人たちの貯蓄や利殖のため、明治33年に赤羽根銀行が設立されたほどです。

また、イワシの煮干し加工も盛んでした。鈴木治左衛門の煮干しはこの博覧会で二等賞となりました。博覧会の受賞者には現在も営業する有名メーカーの名もあり、その品質が確かであったことが分かります。どの



▲鈴木治左衛門の第5回内国勸業博覧会の賞牌



▲渡辺小華 煙草綿花写生図(受賞作品と同図柄の作品 田原市博物館蔵)

ような煮干しであったか味わってみたいものです。賞牌と賞状を収めた額の立派さからもこの受賞がいかに栄誉であったことを示しています。

他にも本市に関する出品者もいました。第1回では渡辺華山の息子、小華の「三河国産煙草綿花図」が出品され「花紋賞」を受賞しました。この賞は龍紋賞、鳳紋賞の次の賞にあたります。あの先駆的な洋画家である高橋由一も同賞に名を連ねています。

しかし、小華の作品区分は「水彩画」となっており、これは美術好きな人にとって違和感があるはずで、同様に高橋由一の作品も「油画」に分類されていますので、海外を意識した「勸業」目的に無理に西洋的

な「美術」という価値観に合わせた苦肉の結果です。

また、この絵の題材の煙草と綿花はまさしく産業振興を意識したもので、芸術としての美術作品でなく、産業としての美術作品であったことが分かります。

その他に明治23年の第3回には、三河セメント株式会社（現在は太平洋セメント株式会社）のセメントが出品されています。

内国勸業博覧会の開催は、政策とは別に庶民にとって、各地の産物や目を見張るような工芸品、最新の技術を見るばかりでなく、日本の近代化を肌で感じる機会でもありました。そして、それは本市も決して無縁ではありませんでした。（増山）